研究ノート

中國東北地區における黒老太太信仰の考察(1)

范　倩　彤

はじめに

中國東北地區では古來、現在にいたるまで胡仙・黄仙（胡は狐、黄は黄鼠狼［黄色いイタチ］を指す）などの動物信仰が流行してきた。これらの動物信仰は、シャーマニズムや道教などの要素を取り入れ、特別で複雑な體系を形成している。

東北の民間においては様々な動物が信仰の對象となり、祭祀されてきた。それらの動物仙は「保家仙」と呼ばれており、その家の祖先と契約し、家族および一族の守護神になったものと考えられている。

一方、神職者である「大神(2)」が祀る動物仙は「出馬仙」或いは「堂仙」と呼ばれている。この「出馬仙」の「出馬」は、一般的に依頼者の求めに應じて隱遁場所から世俗に出向き、治療や占い、豫言などを行うことを意味する(3)。一方、「堂仙」は「一堂の仙」という意味であり、ヒエラルキーを構成する一群の動物仙を表している。大神の職能は、これら「出馬仙」や「堂仙」と人間との媒介者として、祀られている動物仙の力を借りて人々の治病・算命・問事などを行うことである(4)。

これらの東北地區における動物仙の中でも、他の動物仙と少し性格の異なるものとして、「黒老太太」という仙がある。現在の東北地區の流行として、胡仙・黄仙などの動物仙を祀る際には、しばしばこの黒老太太が祀られる。ただ、この黒老太太は神格が他の動物仙よりも少し高く、獨立した仙として區別されている。

本稿で調べ得た一九三〇年代の日本の研究者らによる學術的研究や、同時期の中國東北地區の地方誌には、胡仙や黄仙などの民間信仰に關わる事情が多く記されている。しかし、黒老太太が祀られていたことを示す記述はほとんどない。ごく僅かな例外として、例えば五十嵐賢隆の『道教叢林太清宮志』、白永貞著・孫乃祥校閲の『鐵刹山志』などが擧げられる。これらの文獻資料には、黒老太太について若干の記載が見られる。

また、汪桂平の『東北全眞道研究』は、『鐵刹山志』卷八「鐵刹山雲光洞護法黒大仙之靈跡」を引用して黒老太太の職能を紹介し、その分布場所を示している。汪桂平は黒老太太を含め胡三太爺・胡三太奶などを全て狐仙に屬するものとしており、その上で、「東北の道觀では、これらの神靈は護法神と見做されて」おり、また「これらは地域的な神靈である」と述べている。(5)

これらの資料からは黒老太太の記述が狐、および遼寧省本溪縣の鐵刹山道教と結び附いていることが分かる。しかし、黒老太太に焦點を絞った記載はわずか數筆に過ぎない。

二〇二一年に孫非凡が發表した修士論文「"黒媽媽"民間信仰の人類學的研究―C市S觀爲例（「黒媽媽」民間信仰の人類學的研究―C市S觀を例として）」は先行研究の空白を埋めるものといえる。孫非凡は實地調査に基づいて、現在の東北地區における黒老太太の祭祀に關する分布狀況などを紹介している。また、黒老太太に關する傳説について詳細な分析を行い、社會と文化の視點から黒老太太信仰の形成された理由を論じている。(6) しかし、黒老太太信仰に深く繫がる狐や鐵刹山道教に關しての研究は十分とはいえず、まだ一考の餘地がある。

本稿では、實地調査と文獻調査にもとづいて一九三〇

年代から現在に至るまでの中國東北地區における黒老太太信仰を考察する。具體的には、黒老太太信仰と胡仙信仰との共通點と相違點、及び黒老太太信仰の發展と鐵刹山道敎との關係を分析する。そして、何故黒老太太信仰が現在の東北地區で流行しているのかについて若干の考察を試みたい。

黒老太太の呼稱については「黒大仙」や「黒媽媽」などの別稱があるが、本稿では民間で廣く使われる「黒老太太」という呼稱を使用する。また、中國東北地區とは廣義には遼寧省、吉林省、黒龍江省の東北三省と內蒙古東北部をあわせた地域を指す。本來はこれらを網羅的に調査すべきであるが、今回の實地調査は吉林省と遼寧省に限定して行い、黒龍江省および內蒙古東北部では實施していない。また、プライバシー保護のため、實地調査對象の個人情報に關してはすべて大字のアルファベットで表記する。

一．胡仙信仰にみる黒老太太

黒老太太の由來については、まだ明確な證據は見つけられていない。ただ、民間では黒老太太が他の動物仙と同じようにもともとは動物であると廣く傳えられている。最も可能性があるのは狐（或いは黒狐）である。本章では、黒老太太と胡仙信仰との關係について檢討したい。

一-一．黒老太太の現狀調査

筆者は二〇一九年と二〇二〇年の間、黒老太太の民間における祭祀の形式を把握するため、三回にわたって吉林省のM市と遼寧省の鐵刹山において實地調査した。M市の調査地は、①大神の自宅にある黒老太太、②郊外の土地廟にある黒老太太、③龍王廟にある黒老太太の三箇所である。また、鐵刹山にある黒老太太が祀られる場所は主に黒媽媽殿と八寶雲光洞の二箇所である。以下、それぞれ紹介する。

①大神の自宅にある黒老太太

大神A氏（以下「A氏」と略稱する）は、自宅の中に祭祀用の部屋を持っている。黒老太太の像は黒い衣裝を着て、杖を持ち、桃を手にした高齢の女性であり、横に赤紙が立てかけてある。赤紙の上方には「供奉」、中央には「仙家之位」という文字が書かれ、紙の兩端には對聯が附いている。この對聯には、「積功德步步高升（功德を積みて步步高昇す）」、「出古洞四海揚名（古洞を出でて四海に名を揚ぐ）」と書かれている。

赤紙を用いるのは他の動物仙の祭祀方法と共通している。ただ、動物仙を祀るM市小城隍廟における筆者の調査によると、民間で一般的に見られるのは、一番上に「有求必應（求めがあれば、必ず應じる）」と書かれ、兩端に「在深山修身養性（深山に在りて身を修し性を養う）」、「出古洞四海揚名（古洞を出でて四海に名を揚ぐ）」と書かれたものである。

A氏は、自分が祀っている黒老太太は動物仙に屬するものであると認識していない。また、A氏の言葉によると「黒老太太は東北三省の大護法で、法力が高い」ということだった。恐らくA氏は「守護神」の意味で「大護法」という言葉を用いている。

②郊外の土地廟にある黒老太太

M市の郊外にあるレンガ造りの土地廟である。普通の野外にある土地廟よりもしっかりした建物である。中には泥人形の像が八體あり、複數の動物仙や民間の地方神などが祀られている。左から右にかけて、それぞれ臺座に「胡三太奶」、「黒老太」、「土地奶神位」、「土地公神位」という名が記された四體と、名前が附けられていない四體が置かれている。しかし、名前がない像の前にも木主が置かれており、それぞれ「遊路將軍之位」・「五道將軍之位」・「本郡河神之位」・「苗稼神之位」と書かれている。また、「胡三太奶」と「黒老太」の間には空間があり、ここにはもともと「胡三太爺」の像が置かれていたものと思われる。この土地廟の主位にあるのは土地公・土地奶であり、土地奶の右鄰に濃茶色の衣裝を身に附けた黒老太太の像がある（圖一）。

土地廟の傍に、黒老太太を紹介する看板があり、次の

圖一　M市郊外の土地廟にある黒老太太（二〇一九年九月一四日　筆者撮影）

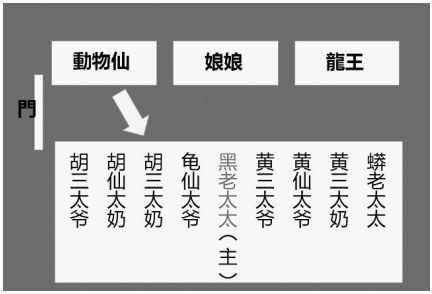
ように書かれている。

黒媽媽の別稱は黒老太太であり、道教の地仙、東北の地方神である。東北三省では、一般的な道觀や寺の中に祀られている。黒老太太の總壇は遼寧省本溪市の九頂鐵刹山にある。傳説によると、黒老太太は九頂鐵刹山の懸石洞で修練し仙となったものである。黒老太太は東北の大護法であり、聖誕日は舊暦の六月二十四日である。

ここで説明されているのは、現在の東北民間における一般的な黒老太太に對する認識だと考えられる。

③龍王廟にある黒老太太

M市の龍王廟には、龍王・娘々、および黒老太太と動物仙が祀られている。最も奥の主殿には龍王、その手前の側殿には娘々が祀られ、そして最も入口に近い側殿の主位には黒老太太が祀られている。その兩脇には複數の動物仙の像が置かれている。これらの像は黒老太太も含め全て人間の姿をしており、シンプルな造形で金色に彩色されている。



圖二　龍王廟の內裝（筆者作成）

圖三　鐵刹山の黒媽媽殿にある黒媽媽像（二〇二〇年八月三〇日　筆者撮影）

左から右にかけて、「胡三太爺」・「胡仙太奶」・「胡三太奶」・「龜仙太爺」・「黒老太太」・「黄三太爺」・「黄仙太奶」・「黄三太奶」・「蟒老太太（ウワバミ）」と名附けられている（圖二）。その名稱から、黒老太太以外の動物仙の原型がどの動物かははっきりしている。

④鐵刹山にある黒老太太

・場所1：黒媽媽殿

黒媽媽殿は、現在鐵刹山の東の門に位置する壯麗な道教建築である。外側の扉には信者らが送った錦旗が掛けてあり、黒い衣裝を纏った黒老太太の大きな像が主位に祀られている（圖三）。殿內の兩脇には、動物仙を擬人化した像が安置されている。左側には「胡仙大太爺」・「胡仙大太

奶」・「胡仙三太爺」・「胡仙三太奶」・「胡仙二太爺」・「胡仙二太奶」、右側には「常仙太爺（ヘビ）」・「常仙太奶」・「黄仙太爺」・「黄仙太奶」・「蟒仙太爺」・「蟒仙太奶」が置かれている。

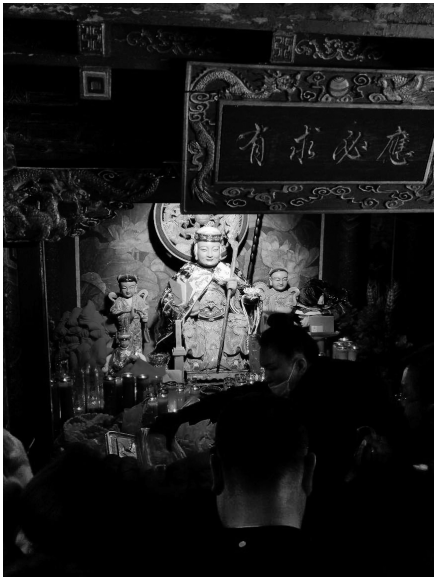
參拜者の中には大神が多くおり、彼らの參拜方法は一般の參拜者と異なっている。例えば、それぞれの神像の下であぐらを組む、小聲でつぶやきつつ五體投地のような姿勢で拜禮を繰り返すなどである。現在の黒媽媽殿は非常に多くの參拜者を集めており、鐵刹山の代表的な場所と言える。

また、二〇二〇年の重陽節には、男女の大神らしき二人が他の一般參拜者を先導して黒媽媽殿外の廣場で祈福の儀式を行っていた。男性は先頭で手に太鼓を持って歌をうたい、女性は男性の後ろで踊りを踊っていた。そして、後ろには一般參拜者たちが續き、女性の動作をまねて、池の周りを回って踊っていた。このような行爲は滿洲族のシャーマンの跳神儀式[7]と類似している。つまり鐵刹山はもともと道教聖地と見做されていたが、現在はシャーマニズムと道教が混淆している狀態と思われる。

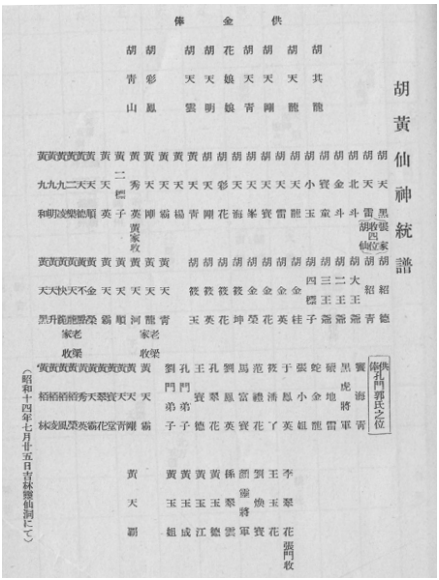
・場所2：八寶雲光洞

八寶雲光洞は古くから鐵刹山の中でも最も有名な場所であった。洞内には八つの奇岩があるため、「八寶」と稱されている[8]。洞内は二階層に分けられており、下階の入り口にある廟には黒老太太が祀られている。黒老太太の像は四角い臺座に安置され、兩脇にはそれぞれ童女と童男がいる。ここの黒老太太の像は金色の衣裝を着ており、華麗なマントを被っている（圖四）。供え物は、酒・果物・菓子などである。大神たちはこの洞内であぐらを組み、瞑想をしている。

また、滿鐵鐵道總局弘報課が編纂した『滿洲宗教誌』には、雲光洞内部の様子が紹介されており、もともと、黒老太太の像は洞の入り口にある護法磚廟に安置されていたと記されている[9]。『本溪縣志』では、文化大革命の際に洞内が破壞され、殘りは僅かであったという記述がある[10]。したがって現在の黒老太太の廟と像は、昔と同じ場所に新しく再建されたものだと考えられる。



圖四　八寶雲光洞にある黑老太太像（二〇二〇年十月二十五日［重陽節］筆者撮影）


胡黃仙神統譜
供
金
俸
胡其熊
胡天雕
胡天寧
胡花娘
胡天娘
胡彩雲
胡鳳明
胡青山
黃天恩
黃天秀
黃天二標
黃天子
黃英
黃柳
黃家收
黃天福
黃天寧
黃天花
黃天彩
胡天寶
胡天寶
胡天寶
胡天寶
胡天寶
胡天寶
胡小熊
胡玉了
胡黃熊
胡玉童
胡金斗
胡北海
胡天雷
黑收家
供位
黃九九
黃九九
黃九九
黃二天
黃天天
黃天天
黃天

今回、黒老太太を祀る大神に對する調査の對象はA氏のみであったが、前述の孫非凡の修士論文では大神の自宅での黒老太太の祭祀狀況にも言及されている。孫によると、自宅で黒老太太を祀る場所は「仙堂」と呼ばれ、黒老太太の像が主たる祭祀對象である。そのほかにも赤い紙や赤い布で「仙堂」のヒエラルキーが書かれている。仙と緣を結んだ百姓（民衆）たちは、仙家らの氏名をそれぞれの地位に應じて赤い紙に書き、それを「仙榜（仙のランキング）」と稱する。

ここで孫が言う「仙と緣を結んだ百姓たち」とは、東北民間の大神たちを指すと考えられる。また、孫の「仙榜」についての記述から見て、これは大神たちが祀る胡黃仙を主とした神統譜とかなり似通ったもののようである。瀧澤俊亮の『滿洲の街村信仰』では、吉林大仙堂で得た胡黃仙らの古い神統譜（古布に書かれた）が示されている（圖五）。また、現在の神統譜として、例えば黃强は中國黑龍江省雙城地區における大神に關する報告[11]において、杜惠萍というシャーマンの祭壇を紹介し、そこに彼女の主神と守護靈の名が赤紙に書かれていることを述べている。黃强は、「杜惠萍が持つ守護靈には動物の精靈が壓倒的多數を占め、特にキツネの靈、イタチの靈、蛇の靈は主導的地位を占める」と述べている。

黑老太太の原型が狐であるという明確な證據はない。ただ、筆者及び上記の報告に見られる實地調査では、民間祭祀及び道敎關係の場所において、黑老太太と胡仙を含めた動物仙の祭祀狀況には重なる部分が多いと考えられる。

一-二：黑老太太の傳說について

東北の民間に流布している黑老太太の傳說には、狐と關連したものがしばしば見られる。本節では、筆者が調べ得た代表的な黑老太太に關連する四つの傳說を紹介する。

黑老太太の傳說については、以前より民間に傳わっていた可能性があるが、文獻上の初出は『鐵刹山志』卷八であり、次いで『增續九頂鐵刹山志[12]』卷十が擧げられる。

兩文獻にはどちらにも、①「鐵刹山雲光洞護法黒大仙之靈跡」と談國桓が編纂した②「黒大仙歌 有序」の二篇が記録されている。その後、黒老太太の傳説の文獻記録は殆ど空白となる。そして二〇一二年に至り、劉緯・劉應が編纂した『鐵刹山道敎』に、③「黒大仙成仙記」および④「地仙觀における黒媽媽」という黒老太太に關連する傳説が收録される。これらを整理して以下に概要を示す。

①鐵刹山雲光洞護法黒大仙之靈跡

（本文では先ず「此れ胡仙の靈を爲すこと昭昭として違わざる所以なり」と胡仙の靈驗あらたかなことを述べた後、そのひとつとして黒大仙のことを次のように説明してゆく。）…我が郭祖師が鐵刹山を開き懸命に修練していた際、時に香火や薪米が供されなかったが、常に黒大仙が密かに守護してくれるのを頼みとしていた。急な入り用があれば、多方面からの援助があり、施しを頼むまでもなくあちらからどんどんやって來た。これ（黒大仙）は誠に郭大眞人の大護法であった。また、大仙は山にいて常に人々の願いに應じ、山の近鄰の村や各地の人々で病を患う者がいれば、ただ敬虔に祈りさえすれば、こっそりと治療してくれ、必ず靈驗があった。あるいは、赤ん坊の母乳が足りない時、酒瓶を持って來て供え、水瓶を携えて歸り、その水で粥を炊き乳母に食べさせると、すぐに乳が出た。このような様々な靈驗は常に現れた。何度試しても違わなかったので、遠近に關わらず、信者の善男善女たちはみな黒大仙の恩德を讃えてやまなかった。（中略）それゆえ、奉天全省の宮觀は、それが郭眞人及び彼の弟子が建立した廟であれば、たとえば本山太清宮、千山無量觀、閭山圓通觀などの各所はどこも必ず像を置き、朝夕に香火を供え、みな黒老太太を稱えている。ああ、なんと盛んなことか。[13]

②黒大仙歌 有序

（前略）黒大仙とは、すなわち俗に黒老太太と言われるものがそれである。初め山東省卽墨縣馬鞍山

に居たが、清朝初期に郭道人とともに遼寧省に行き、本溪湖の鐵刹山で修行した。郭は盛京烏將軍の供養を受け、雨乞いをするとすぐに雨が降った。（郭道人は）民に對して功勞があったが、それらは實は黒大仙のおかげであった。烏將軍は郭のために瀋陽城の西北の隅に廟を建てた。現在の太清宮である。遂に黒大仙は郭とともに廟中に祭られるようになり、香火が絶えなくなった。母乳の足りない婦人が酒瓶を机の前に置いて祈ると、酒を水と交換し、それを持ち歸って飲むと、乳がすぐに出た。非常に靈驗あらたかである（後略）[14]。

③黒大仙成仙記

郭守眞が遼東を遊歴し鐵刹山に泊まった時に、ある黒狐に出會った。黒狐は跪き彼に弟子にしてくれるよう懇願するが斷られる。しかし黒狐は諦めずそのまま跪いていた。その後、郭守眞はしばらく鐵刹山に住み、また行脚して名師を訪ねた。數年後、郭守眞が再び鐵刹山に戻ると、果たして黒狐は元の場所に跪いたまま白骨と化していた。郭守眞は非常に驚き、こう言った。「畜生は教え導くことができないと言われているが、實は畜生にも知惠があり、得道できるはずだ」と。郭守眞がそう言い終えると、白骨は一陣の清風となって見えなくなった。郭守眞はこの黒狐がすでに半分修行を終え、彼の教化を經てついに得道し仙になったことを知った。

それから、黒大仙は郭守眞に從い、ひそかに彼を助ける。盛京が干害を受けた際、烏將軍は郭祖に雨乞いをしてもらうと、すぐに雨が降った。これらは黒大仙がひそかに助けたのだ。その後、郭守眞の弟子らが太清宮に郭祖師を祀ると、黒大仙も共に廟の中に配祀された（後略）[15]。

④地仙觀における黒媽媽

明末、山西に京城へ行って試驗を受ける擧人の郭守眞という者がいた。何度か試驗に失敗し、四方八方を放浪していた。郭守眞が山東省泰安の道觀に泊まっていた時、彼は山で怪我をした黒狐を助けた。

この黒狐は恩返しのため、郭守眞に從って鐵刹山へ行き、懸石洞（地仙觀）に住んで、郭守眞に困難があれば、ひそかに彼を助けた。郭守眞は黒大仙（黒狐）に恩を返すため、雲光洞の側殿に「護法黒大仙」という位牌を立てた。一六六三年、奉天は干害で數ヶ月雨が降らず、奉天首府の官吏が郭守眞に雨乞いを頼み、郭守眞が雨乞いの儀禮をするとすぐに大雨が降った。實はこれも黒大仙のおかげであった（後略）[16]。

このように黒老太太の傳說の內容は概ね類似しており、以下の3點のような特徵が見られる。①黒老太太の原型は多くの場合、狐であると考えられている點。特に「黒大仙成仙記」・「地仙觀における黒媽媽」では「黒狐」と記述されている。②黒老太太は鐵刹山道士の郭守眞と關係が深い點。郭守眞が盛京で雨乞いをした際に雨を降らせたのも、黒老太太の加護であったと書かれている（郭守眞の經歷は文獻により異なるが、これについては後に詳しく述べる）。③黒老太太の職能として、主に母乳不足及び雨乞いに靈驗がある點。

各文章の編者の認識として以下のような特徵が擧げられる。傳說①「鐵刹山雲光洞護法黒大仙之靈跡」は、一九三〇年代に、鐵刹山の監院であった爐至順[17]が口述したものであり、當時の傳承內容が分かる貴重な資料である。この資料から爐至順は、黒大仙を胡仙のひとつと認識していたこと、また祖師の郭守眞が雲光洞で修行していた際に黒大仙から加護を受けていたと考えていることが分かる。つまり、爐至順は、黒老太太を郭守眞の守護神、或いは鐵刹山道教の護法神と認識していたと考えられるのである。

傳說②「黒大仙歌　有序」には黒老太太が狐であるという記述はないものの、「大仙」という名稱自體、動物仙を指す場合があり、談國桓も「黒大仙」を少なくとも動物仙のひとつと見なしていた可能性が高い[18]。また、①と同じく、談國桓も黒老太太は道人の護法であると考えていることがわかる[19]。

一方、傳說③「黒大仙成仙記」は吉林省磐石市玉虛宮

の郎錬丹（道士であろう）の口述をもとに張華がまとめたものである。傳說①と比較して、傳說③では「弟子入り」と「黑狐」という要素が現れている。「弟子入り」という要素が入ることで、①の「郭守眞が黑大仙から援助をうけた」という事柄よりも、黑老太太が仙になるために郭守眞の教えを受けたという事柄の方が强調されている。つまり、郎錬丹は表向きは黑老太太の神格の高さを稱えているが、實際には郭守眞のほうが上であると認識していると考えられる。そして、傳說④は『鐵刹山道教』の中でその編者の一人である劉緯によって書かれたものであるが、情報源は記されていない。內容は傳說③と大同小異であり、黑老太太の原型は黑狐であると記述している。

ここで「黑狐」という要素の出現時期について檢討したい。まず、傳說③が語られた玉虛宮についてであるが、この道觀に關連する文獻資料は少ないが、二〇〇六年に出版された『磐石市志（一九九一年-二〇〇三年）』には次のように書かれている。

玉虛宮は石咀鎭北馬宗村廟溝屯北山南坡に位置する。初めは光緒一三年（西曆一八九七年）に建立され、文化大革命時期に破壞された。一九九七年、道士の楊鼎雙が弟子を率いて元の場所に道觀を再建し、一九九八年十二月に再開した[20]。

ただ、ここでの光緒の年號と西曆は一致していない。光緒一三年は一八八七年であり、一八九七年は光緒二三年である。一九九九年に出版された『磐石縣志』には次のような記述がある。

一九四七年、縣全體では一一の廟宇が殘っており、道士は二〇人餘りであった。後に社會變革を經て、すべての道觀は基本的に取り壞されたが、ただ安樂鄉北馬宗廟溝屯には上淸宮が殘っていた（この廟は光緒二三年に建立されたものである）。道士は二人（張寶慶と彼の弟子）いたが、原廟は文化大革命時期に取り壞された（後略）[21]。

つまり、『磐石市志（一九九一年-二〇〇三年）』の光緒年の表記が誤っており、實際の成立年代が一八九七年

（つまり光緒二三年）であったとすると、ここでいう「上清宮」は「玉虚宮」の前身であり、一九九八年の頃に名稱が變わったと考えられる。ただ、例えば康德四年（一九三七年）に編成された『民國磐石縣鄕土志』の「壇廟」では、磐石縣内における文廟、祖師廟、城隍廟、財神廟、仙峯觀、靈神廟、三聖宮、寶山宮、鬼王廟、吉雲觀、壽山宮という一二の廟が列擧されているが、これらは成立年代や場所ともに上清宮に對應していない。[22]

ここの『民國磐石縣鄕土志』には記入漏れが發生している可能性があるが、「上清宮」についてのより古い資料は發見されていない。しかし、たとえ上清宮の成立年代が光緒二三年だとしても、その成立年代は鐵刹山雲光洞や太清宮建立以後である。そして、一九四七年以降から文化大革命が始まるまでの間、道士が二人しかいなかったことから、上清宮はそれほど大きな規模のものではなかったと思われる。一九四七年以降、この場所のみ保存されていたのは、規模が小さく無視されていたからかもしれない。いずれにせよ、遅くとも一九九八年の頃、吉林省磐石市にあったこの道觀で黒狐を原型とする黒老太太の傳説が存在していたことが確認できる。

次に、四つの傳説ではいずれも實際に起きた郭守眞の雨乞いに言及していることから、郭守眞と關わる黒老太太傳説が創作されたのは少なくとも康熙二年（一六六三年）以降であると考えられる。五十嵐賢隆が『道教叢林太清宮志』を作成した際、鐵刹山雲光洞に關する多くの資料は爐至順によって提供された。[23]かりに黒老太太が黒狐であるという説が康熙二年邊りにまで遡れるとすれば、一九三〇年代の鐵刹山監院である爐至順が黒狐について全く言及していないのは不自然である。また、ほぼ傳説①と同時期の傳説②でも黒狐については觸れられていない。上清宮（玉虚宮）の成立年代とも併せて考えれば、一九三〇年代の傳説①と②は、傳説③と④よりも早く成立したものであると考えられる。

「黒狐」と明示されるのは傳説③④になってからであるが、①②の段階からすでにこの神格が「黒」の名を冠していたことから、潜在的には①②の段階から黒老太太

が「黒狐」としてイメージされていた可能性を排除するものではない。

現在までのところ、黒老太太が「黒狐」と見做される理由については資料を發見できておらず筆者の考察も不十分であるが、少なくとも以下の二點を指摘できる。

一つ目は、清朝の頃、黒狐は東北地區に分布していたという點である。例えば、『滿文《滿洲實錄》譯編（清史研究叢書）』には「本地所產」のものとして「黒狐」が擧げられている。[24] このように東北地區にはもともと黒狐が生息しており、黒老太太の名前「黒」が黒狐と繋がっている可能性がある。二つ目は、相對的に稀少な黒狐は普通の狐より珍重されていた點である。[25] この點は、黒狐から仙になった黒老太太が一般の狐仙よりも神格が高いと考えられているのとパラレルになっている。現在、東北民間において黒老太太は、道教神のヒエラルキーの中では、他の動物仙と同じく神格の低い仙家の一つと見做されている。しかし同時に、胡仙を含む他の動物仙とは一定の區別がなされ、特別な仙家として祀られている。

郭守眞は鐵刹山で黒い狐に出會った。それは「黒老太太」という女神に神格化されたものである可能性があるが、黒狐であろうと狐であろうと、それらは胡仙信仰の範圍に屬する。いずれにせよ、上記の傳說からは、遲くとも一九三〇年代の文獻資料では狐と結びついていたことが分かる。また、前述した實地調査によると、黒老太太の祭祀形式は現在、胡仙を含む動物仙のそれとかなり類似している。黒老太太が胡仙信仰と深く結びついていることは確實である。

しかし、ここにいくつか問題點が存在している。一つは、民國時代（一九一二年から一九四九年の間）の東北地區の地方誌には、胡仙や黃仙などの動物信仰に關わる事情が多く記されているが、黒老太太については殆ど言及されていないことである。もう一つは、胡仙信仰には自らのヒエラルキーがあるが、この中には黒老太太は含まれていないことである。これらについては次章で、黒老太太と鐵刹山道教との關係を踏まえて檢討したい。

二．黒老太太と鐵刹山道教

前章では、黒老太太が鐵刹山道教や道士の郭守眞と密接に繋がっていることを確認した。本章では、黒老太太と鐵刹山道教の關係について檢討したい。

二―一．郭守眞と鐵刹山道教

郭守眞の經歴については、『奉天通志』に記載されている。[26] その他『鐵刹山志』卷六と五十嵐賢隆の『道教叢林太清宮志』には、どちらにも太清宮院内における「龍門八代祖郭眞人碑」の碑文が收錄されている。

『道教叢林太清宮志』第一章の第五「太清宮郭祖道行碑の建立」によると、五十嵐は太清宮に關する資料を探査するあたり、鐵刹山三清觀監院爐至順の協力を得た。その際、爐至順は「三教堂（後に「太清宮」と改名した）」を創建した師祖である郭守眞のために建碑しようと主張した。その後、通志館長である白永貞を含め多方の援助を受け、建碑が實現した。この石碑は康德元年（一九三四）に建立されたもので、爐至順が口述し、白永貞が記錄したものである。[27] また、『奉天通志』における郭守眞についての解説も、基本的に碑文に基づいたものである。以下、碑文の内容を概説する。

郭守眞、字は致虛、號は靜陽子である。明の萬曆三十四年丙午秋九月二十九日に生まれ、原籍は南京丹陽縣であり、今は江蘇定遠村人に屬する。崇禎三年、郭は鐵刹山八寶雲光洞に隱棲し始め、十數年間を經ても道の眞源を知ることができず、鐵刹山を離れ名師を訪ね歩いた。清の順治六年、山東省卽墨縣馬鞍山聚仙宮に行き、紫氣眞人李常明に師事した。順治八年、燕京の白雲觀王眞人のもとで受戒した。その後、鐵刹山に戻り、雲光洞で弟子を取って布教していた。康熙二年、盛京（今の瀋陽）で干害が起こり、烏庫禮將軍が郭守眞を招聘して祈雨した。郭が祭壇を設けて祈るとすぐに雨が降った。そして、烏庫禮將軍は三教堂（今の太清宮）を建て、郭眞人と諸弟子を住まわせ、禮儀正しく應對した（後略）。[28]

しかし、郭守眞の經歴については、いくつか疑問點がある。汪桂平は、郭守眞が白雲觀に行った時期に鑑みて、實際に王眞人（王常月）と出會った可能性は低く、これは東北道教が龍門派の正統であることを證明するための後世の創作である可能性が高いこと、但し、明末清初、白雲觀には王萊陽という道士がいたので郭守眞が白雲觀で王姓の道士に會った可能性はゼロではないことを指摘している。[29]

一方、郭守眞が龍門派の第八代の弟子と見做されたのは、山東省卽墨縣馬鞍山聚仙宮の李常明に師事したことによる。『鐵刹山志』卷七に收錄された「龍門正宗派系傳統略曆」によれば、郭守眞は李常明の弟子であることが分かる。[30]

ただ、そもそも李常明は龍門派の第七代の弟子とされているが、この點については更に考證が必要であり、趙衞東は「李常明一系龍門派傳承考」で、李常明の祖師源流に關連する記載について『鐵刹山志』以外に眞實性を證明する文獻資料が見當たらないことや、丘處機と李常明の閒には四五〇年以上の隔たりがあるにも關わらず七代しか受け繼がれていないなどの問題點を指摘している。[31]

いずれにせよ、以上の文獻資料によって、郭守眞が鐵刹山に戻り東北地區で布教を行っていたことは明らかである。ただし、郭守眞の出身については、前章の傳說④に述べられた山西の擧人である郭守眞が山東省泰安の道觀に泊まっていたという記述と異なっている。「山東省泰安の道觀」とは、前述の「聚仙宮」を指している。また、「山西の擧人」というのは恐らく後世の弟子たちが郭守眞の學識を讚えるための虛構と考えられる。しかし、今回、筆者は關連する資料を發見できておらず、また西安と山東省泰安での實地調査もしていないため、ここで結論を出すことはできない。

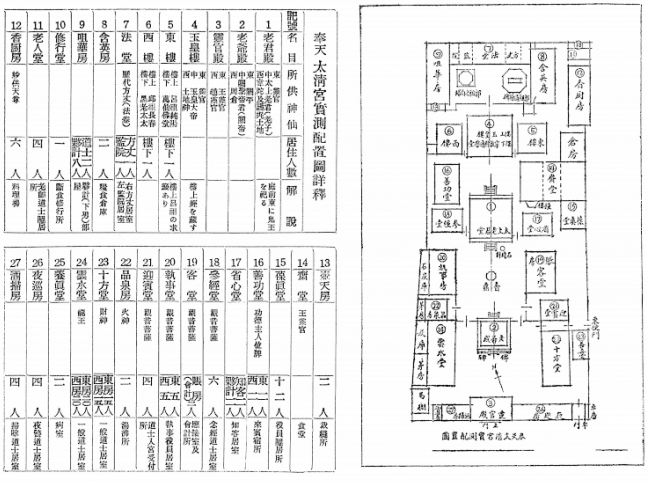
そして、碑文の經歴よりも、郭守眞にとって重要な出來事は、康熙二年（一六六三年）に盛京で祈雨した事であると思われる。この時の祈雨の成功は郭守眞の人生の轉機であり、これをきっかけとして東北地區での布教は大いに發展したのである。

また、黒老太太の傳說にも、祈雨の話が何度も現れている。ただ、碑文と異なり、傳說では祈雨の成功と黒老太太の援助とが關連づけられている。ここでは、黒老太太の强い神通力について述べながら、實は郭守眞がその神通力の恩惠を授かったこと自體が偉大なのだと表現されている。つまり、黒老太太を崇めながら、より高く郭守眞を讃えているものと考えられる。

二-二：黒老太太の發展について

黒老太太信仰の起源は、今にわかには結論を出すことができない。ただ、五十嵐賢隆の『道教叢林太清宮志』には、黒老太太は太清宮の「西樓樓上」に祀られているという記述（圖六）、また「護法太太　六月二十四日祝壽　西樓（黒老太太）[32]」という記述がある。

ここの「護法太太」は「黒老太太」の別稱であり、前文の爐至順が述べた傳說①の「これ（黒大仙）は誠に郭大眞人の大護法であった」という記述に對應する。ここから、鐵刹山及び太清宮では、黒老太太が「大護法」つ



圖六　奉天太清宮實測配置圖詳釋（五十嵐賢隆［一九三八］口繪）

まり「郭守眞を護る仙」として祀られていたと考えられる。

そのため、黒老太太の祭祀場所は、郭守眞の鐵刹山から太清宮までの布教過程と一致していると推測できる。黒老太太が信仰對象となり始めた時期は、郭守眞が鐵刹山に戻って東北地區で布教を行った時期である可能性が高く、少なくとも太清宮が建立された時期には、既に存在していたと思われる。

一方、『鐵刹山志』では、黒老太太の信者が多く、郭眞人及び彼の弟子が建立した道觀には黒老太太が祀られていたと書かれている。しかし、一九三〇年代の黒老太太に關連する文獻資料は少ない。例えば瀧澤俊亮らによる學術的研究[33]や同時期の中國東北地區の地方誌（表1）には、胡仙や黄仙などの民間信仰における動物信仰の祭祀について數多く記載されているが、道觀以外の民間信仰の場における黒老太太についてはほとんど言及されていない[34]。

もちろん文獻記録はないが、民間祭祀において大神が黒老太太を祀ることがまったくなかったとは限らない。ただ、前述のように五十嵐は太清宮に祀られる黒老太太の祭祀場所と生誕日に言及しているが、詳細な説明はない。これは、當時の黒老太太は普通の護法神（守護神）として祀られており、特別に扱う必要がなかったためと思われる。このため、當時の民間では黒老太太の祭祀が存在していたとしても、その影響力はすでに流行していた胡仙信仰と比べて微々たるものであったのだろう。

中國は、古來しばしば狐を信仰の對象としており、唐の時代にはすでに盛んであった[35]。姜小莉は「試論滿族薩滿教對東北民間信仰的影響」で、地仙信仰は東北地方の開禁と漢民族流入に伴い、清末民國初期には東北全域に廣がっていったが、その際に神職者に對する呼稱や祭祀の仕方などにおいてシャーマニズムの要素を取り入れたと述べる[36]。

前章で述べたように、鐵刹山道教の修行者たちはすでに黒老太太と胡仙のイメージを結びつけていた。しかし、少なくとも一九三〇年代までの民間では、たとえ黒老太

太を知っていたとしても、それを道觀に祀られる道教の神格であり、自分たちが街村で祀る胡仙のひとつには入れていなかったと考えられる。

例えば、滿洲事情案內所が編纂した『滿洲國の習俗』では「胡三太爺は滿洲獨特の神で、一般には胡仙と稱へられてゐるが、音が共通なところから狐仙の轉化したものとみられる[37]」と記され、更に瀧澤は「胡仙の長は胡三太爺で、天上に住む全智全能の神である。その下に黃二太爺がある。彼等は狐と鼬等の動物神だといふ。」と指摘している[38]。また內田智雄は一九三〇年代の頃、後三塊石屯での村民へのインタビューで胡仙は「大太爺・三太爺」などと呼ばれていると記錄している[39]。つまり、胡仙を代表するのは胡三太爺であり、黑老太太はこれらの村民への聽取記錄には出てこない。

ただ、前章の筆者の二〇一九年・二〇二〇年の實地調査では、黑老太太は動物仙に組み入れられており、しかも胡三太爺より地位が高く、民間で廣く信仰されていることが分かる。その理由について、以下のように考えられる。

一九八〇年代以降の宗教政策により、中國の宗教活動は次第に再開され[40]、東北地區の道教も復興し急速に發展してきた。また、この時期には、昔からの動物信仰も民間で復興してきたが、人々の意識の中では、これらは迷信や俗信としてマイナスのイメージも伴うものであった。一方、黑老太太信仰は胡仙を代表とする動物信仰と、治療などの神通力において類似點が多く、またその傳說も狐と關連したものであるが、すでに淸から鐵刹山道教の修行者と結びつき、比較的早くから道教神として正統的な地位を確立していた。

一方、民間の動物仙を祀る大神は權威を高めるため、自分の祀る動物仙を高位宗教の神々の體系に組み入れようとする傾向がある。この際に、胡仙の屬性と道教神の屬性をともに持っている黑老太太は、民間大神にとって自然な選擇だったと思われる。

したがって、民間の動物仙を祀る大神は黑老太太の正統性を借りるため、それを民間の動物信仰の祭祀の中に

取り入れたと思われる。そして、現在の黒老太太を祀る大神は、普通の動物仙を祀る大神に對して優越感を持ち、自身の法力の強さを誇っている。このようなイメージがあったからこそ、黒老太太は民間の大神の中にも急速に廣まったと考えられる。

郭守眞の布教と鐵刹山道教の發展に伴い、黒老太太は郭守眞の個人的守護神から、東北道教の守護神（護法太太）に昇格した。[41] その後、民間の大神が黒老太太を動物信仰に取り込み、その神格は東北「道教」の護法神であるのみならず、東北「地區」全體を守護する「大護法」へと格上げされたのである。

まとめ

本稿では、一九三〇年代から現代に至るまでの、東北地區における黒老太太信仰と胡仙信仰との關係、及びその發展過程について考察することを試みた。

現在の東北民間では、黒老太太は東北地區の大護法（守護神）とされ、胡仙や黄仙などの動物仙と共に祀られており、常に中央に置かれている。その祭祀形式は胡仙を含む動物仙のそれとかなり類似していることや、また黒老太太の傳說はしばしば狐と結び附けられていることから、黒老太太信仰は、清の時代に東北地區で盛んであった胡仙信仰の影響を受けたと思われる。

また、黒老太太信仰は鐵刹山道教と郭守眞の布教と密接に關連している。一九三〇年代の文獻資料によると、黒老太太信仰は東北における郭守眞の布教とともに發展してきた可能性が高く、最初は東北各地の郭守眞及びその弟子らの道觀において黒老太太が配祀神として祀られている。しかし、少なくとも一九三〇年代までは、黒老太太信仰は東北民間にまでは廣がっていなかったと考えられる。

例えば『鐵刹山志』に收錄された狐と關連する黒老太太の傳說から、鐵刹山道教の關係者（道士及び附近の信者ら）の認識においては、黒老太太は胡仙の一種とみなされており、さらに彼らは、黒老太太が郭守眞、或いは東北道教の守護神であると考えていた。ただ、同時代の

黒老太太に關連する文獻資料は少なく、また動物信仰が記載されている地方誌及び文獻資料にも黒老太太については殆ど言及されていない。恐らく當時の民間祭祀（大神の認識）では、黒老太太は狐を含む他の動物仙とは一線を畫したものであった。つまり、一九三〇年代までの黒老太太信仰は東北地區の中でも鐵刹山附近に限定的な信仰であったと考えられる。

清末から民國時期にかけて、東北地區では動物信仰が滿洲族のシャーマニズムと融合し非常に盛んであった。一方、東北地區で道教が本格的に廣まったのも清代、郭守眞による鐵刹山での布教からであったが、おそらく民間での影響力はまだまだ弱かったのではないだろうか。

東北地區における庶民の自宅に祀られている保家仙、及び大神が祀っている仙は、いずれも動物仙のイメージである。また、郭守眞の守護神（護法）として扱われていた黒老太太も、當地の胡仙信仰を取り入れて形成された可能性がある。黒老太太は、當地鐵刹山を舞臺とする傳說の守護神という點で、三清などの正統で高位の道教神よりも親しみやすく、また、胡仙の要素を持つという點で、動物信仰が浸透した東北の人々に受け入れられやすかったものと考えられる。黒老太太信仰は、始めは鐵刹山の道士達、次いで大神達による祭祀を媒介として、次第に東北地區民間に廣まってきたのであろう。

ただし、黒老太太信仰の來源についてはまだ明らかにし得ていないところが多く、狐（黒狐）という要素や鐵刹山道教との關係はまだその一部に過ぎないと考えている。それらの檢討については今後の課題としたい。

註

（1）　本稿は筆者が二〇一一年三月三一日に大阪府立大學人間社會システム科學研究科において修士學位（人間科學）を取得した論文「中國東北地區における動物崇拜の特性―胡仙信仰を中心に―」に基づき、新たに考察を加えて著述したものである。

（2）　東北地區では、憑依され、トランス狀態に入って患者の治病を行うような人物を、「シャーマン」の語源となった滿洲語の「シャマ（shama）」から中國語で「薩滿（sǎmǎn）」と呼んでいる。瀧澤俊亮著『滿洲の街村

信仰』（第一書房、一九八二年［初版は滿洲事情案內所、一九四〇年］、一九七～二〇一頁）參照。東北民閒では、胡仙や黃仙などの動物仙を祀る者を俗に「大神」と稱する。『海龍縣志』（海龍縣志編修委員會刊行、康德四年［一九三七年］三月一日、「跳神」第十四卷）參照。筆者は現地調査により彼らが現在も「大神」や「大仙」等と呼稱されていることを確認している。

（3）　大神（男女ともにいる）は神々を統率して人の病氣を治療する。これを出馬という。註（2）前揭書、『海龍縣志』「跳神」第十四卷參照。

（4）　東北民閒において動物仙に對する呼稱に統一された基準はなく、他にも「地仙」や「草仙」などの呼稱もある。今回、筆者は動物仙の職能によって分類した。

（5）　汪桂平著『東北全眞道研究』（中國社會科學出版社、二〇一四年、二五六～二五七頁）參照。

（6）　孫非凡「（原題）“黑媽媽”民閒信仰的人類學研究――以C市S觀爲例」（吉林大學人類學修士論文、二〇二一年）。

（7）　「跳神者、或用女巫、或以冢婦、以鈴繫臂後、搖之作聲、而手擊鼓。鼓以單牛皮冒鐵圈、有環數枚在柄、且擊且搖、其聲索索然。而口致頌禱之詞、詞不可辨。禱畢、跳躍旋轉、有老虎、回回諸名色…」丁世良・趙放主編『中國地方志民俗資料匯集・東北卷』（書目文獻出版社、一九八九年、［楊賓撰『柳邊紀略』康熙四十六年〔五卷、民國二〇至二三年金毓黻輯遼海書社鉛印『遼海叢書』〕］三頁）參照。

（8）　黃國富等編譯『鐵刹山志』（遼寧人民出版社、二〇〇一［初出は白永貞著・孫乃祥校閱、奉天文新印刷所、一九三八年］、一六～二〇頁）參照。

（9）　「鐵刹山道觀の內容（奉祀神佛）宗派：龍門派 雲光洞：洞口內護法磚廟 黑老太太一尊」芝田研三著・鐵道總局弘報課編『滿洲宗教誌』（一九四〇年、七五頁より一部拔粹。［この箇所は、五十嵐賢隆『滿洲の名山と道教』の記載內容を基に記述したものである。］）

（10）　「…後經十年浩劫、八寶多被毀壞、如今難以識辨。原來洞中有八尺石廟三座、供銅像六尊、也被洗掃一空、僅餘殘磚破瓦。」本溪縣志編纂委員會編『本溪縣志』（內部發行、一九八三年、八五一頁）參照。

（11）　黃强「中國東北部の民閒におけるシャーマニズム――黑龍江省雙城地區の大神と呼ばれるシャーマンを中心として――」（『國際關係學部紀要（中部大學）』一九九九年、No. 23、三九～五七頁）參照。

（12）　張傑貴・佟春麗・劉緯校註『增續九頂鐵刹山志（校註本）』（民族出版社、二〇一一年）。

（13）　「…此胡仙之爲靈、所以昭昭不爽也…我郭祖開山伊始、辛苦修煉、或香火不供、薪米不給、恆賴黑大仙默爲保護、

遇有急需、皆多方補助、不待募求、自源源而至。是誠郭大眞人之大護法也。且大仙在山常有感應。山之鄰屯及四方人民有患病者、苟虔心祈請、默輒爲施治、靡不神效。或有小孩缺乳、持酒瓶來上供、攜水瓶歸、用水煮粥、乳母食之、立卽有乳。似此種種表異、習以爲常。歷驗不爽、以故無有遠邇、善男信女皆頌黒大仙之恩德不衰。…故奉天全省之宮觀、凡郭眞人及門徒所創廟庭、如本山太清宮、千山無量觀、閭山圓通觀各處、靡不設有法像、朝夕供香火、鹹稱之爲黒老太太焉。籲！可謂盛矣。」註（8）前掲書、（三九三～三九五頁）參照。

（14）「黒大仙者、卽俗所謂黒老太太是也。初居山東卽墨縣馬鞍山。清初同郭道人度遼、同修於本溪湖之鐵刹山。郭受盛京烏公之供養、禱雨輒應、有功於民、仙實左右之。烏爲郭拔地建廟於沈陽城西北隅、卽今之太清宮也。仙與郭遂同附祀於廟、香火甚盛、婦人乏乳者、置瓶酒禱於案前、易水而歸、飲之、乳輒下。靈異昭著…」談國桓編纂、『鐵刹山志』卷八に收錄、註（8）前掲書、（三九六頁）參照。

（15）吉林省磐石市玉虛宮の郎鍊丹の口述に基づき、張華が編纂したものである。原文は現代中國語であり、筆者が日本語で要約した。劉緯・劉應編著『鐵刹山道敎』（民族出版社、二〇一二年、二〇七～二〇九頁）參照。

（16）註（15）前掲書、（二一〇～二一三頁）參照。（筆者要約）

（17）爐至順（一八七六～一九四六）山東棲霞縣の出身、龍門派第二十一代、雲光洞三清觀監院である。註（5）前掲書、（一九七頁）參照。

（18）「大仙」は一般的に民間の大神を指す言葉だが、動物仙を指す場合もある。瀧澤は調査により、永興泉の外庭にある小祠には「胡仙が上位に、山神以下は下位にある。胡萬成大仙を中心にして右側には成育大仙・諸胡仙・金龍大仙・胡成德大仙・林實山大仙、左側には柳向思大仙・胡成一大仙・胡成斗大仙・諸黃仙・黃成明大仙を竝記してゐる」と述べている。ここで姓に「胡・黃・柳」を冠しているのはいずれも動物仙である。つまり、民間祭祀では動物仙を「〇〇大仙」と呼ぶ場合もあることが分かる。また、瀧澤による胡仙に對する調査では、胡仙などの動物仙が祀られる場所の中には「大仙堂」という場所もあることが確認されている。註（2）前掲書、二〇九～二一二頁參照。

（19）ただ、「黒大仙歌 有序」には黒老太太の經歷に矛盾する部分がある。例えば前半で「清朝初期に郭道人とともに遼寧省に行く」と書いているのに對して、後半では郭守眞が鐵刹山で修行をしていた時、萬靈や仙家たちがここに集まってきて、その後、黒大仙が彼の護法になったということが書かれている（原文：萬靈翕聚眾仙來、

昕夕虔修相與共。其中乃有黑大仙、現女子了夙緣。遂與道人做護法、壺中日月別有天。」註（8）前掲書、三九七頁）參照。

（20）　磐石市地方志編集委員會編『磐石市志（一九九一年－二〇〇三年）』（吉林文史出版社、二〇〇六年、五四〇～五四一頁）參照。

（21）　磐石縣志編纂委員會編纂『吉林省地方志叢書三七　磐石縣志』（吉林人民出版社、一九九九年、七九六頁）參照。

（22）　鳳凰出版社編選『中國地方志集成：吉林府縣志輯③』（鳳凰出版社、二〇〇六年、二二七～二二九頁）參照。

（23）　五十嵐賢隆『道教叢林太清宮志』（國書刊行會、一九八六年、［滿州圖書文具株式會社昭和十三年刊の複製］一〇頁）參照。

（24）　「本地所產、有明珠、人參、黑狐、元狐、紅狐、貂鼠、猞猁猻、虎、豹、海獺、水獺、青鼠、黃鼠等皮…」祁美琴・强光美編譯『滿文《滿洲實錄》譯編（清史研究叢書）』（中國人民大學出版社、二〇一五年、一二八頁）參照。

（25）　清の富爾丹は『寧古塔地方鄉土志』で、元狐は最も高價であると記述している。ここでいう「元狐」の「元」は「玄」であり、前述の「黑狐」と同樣に黑い毛の狐であると考えられる。いずれにしても、黑い狐の價値は普通の狐（赤狐）より高いことが分かる。（原文：「狐：色赤而大、夜擊之、火星進出。毛極溫媛、集腋爲裘、尤貴重。元狐出下江、大於火狐、色黑毛媛、最貴。」遼寧省圖書館編『東北鄉土志叢編』（遼寧省圖書館、一九八五年）所收。當該箇所の原書は［富爾丹撰『寧古塔地方鄉土志』（清）光緒一七年（一八九一年）］八〇〇頁參照。

（26）　「郭守眞字致虛號靜陽子…三教堂更名爲太清宮」（奉天通志館編『奉天通志』卷二百二十二「人物五十・方外」奉天通志館、一九三四年、六～七頁）參照。

（27）　註（23）前掲書、（五〇～五一頁）參照。

（28）　「郭守眞字致虛號靜陽子誕生於明萬曆三十四年丙午秋九月二十九日…原籍南京丹陽縣今屬江蘇定遠村人後遷遼郡崇禎三年隱於鐵刹山八寶雲光洞…苦修十餘載未得窺道眞源…順治四年丁亥下山訪道…六年行抵山東卽墨縣馬鞍山聚仙宮謁紫氣眞人李祖常明…遂師事焉…八年詣燕京王眞人白雲觀求戒圓滿後仍隱鐵刹山持戒熏修…在雲光洞收度弟子…康熙二年癸卯盛京幾內亢旱烏將軍庫禮延請高士祈雨眞人應聘…率劉太琳等如壇虔禱甘霖立沛烏公乃命於外攘關角樓西武元池撤水築基起樓三楹遵奉玉帝樓前建三教堂延眞人與諸弟子居之竝與諸長官崇以師禮…」註（23）前掲書、（五二～五三頁）參照。

（29）　註（5）前掲書、（一〇三～一〇四頁）參照。

（30）　民國十三年（一九二四年）、爐至順は馬鞍山を訪れ、

馬鞍山道教の一脈の宗譜を整理する要望を提出し、その後、馬鞍山の李成德が編纂を始めた。註（8）前掲書に收錄された卷七「道教龍門派馬鞍山宗譜序」（三八〇～三八三頁）參照。この宗譜の内容は『鐵刹山志』卷七と『增續九頂鐵刹山志』卷十に轉寫されている。しかし、馬鞍山の宗譜の原本は逸したようである。註（5）前掲書、（一〇五頁の註一）參照。

（31）趙衞東「李常明一系龍門派傳承考」（『全眞道研究』二〇一三年、〇〇期、四二～七一頁）參照。

（32）註（23）前掲書、一四〇頁參照。

（33）一九三〇年代頃、瀧澤俊亮は奉天城壁附近、吉林市街、敦化附近、延吉などの地域で、胡・黄仙の祭祀狀況について調査した。瀧澤の研究には約八六の調査對象が示されているが、黒老太太には言及されていない。註（2）前掲書、二二〇～二四二頁）參照。

（34）本稿末尾の表一を參照のこと。

（35）胡堃「中國古代狐信仰源流考」（『社會科學戰線』吉林省社會科學院、一九八九年〇一期、二二二～二二九頁）參照。

（36）姜小莉「試論滿族薩滿教對東北民間信仰的影響」（『吉林師範大學學報（人文社會科學版）』二〇一一年、No.3、二三～二六頁）參照。

（37）滿洲事情案內所編『滿洲國の習俗』（滿洲事情案內所、一九三五年、三二～三三頁）參照。

（38）註（2）前掲書、二一一頁參照。

（39）內田智雄著『中國農村の家族と信仰』（弘文堂書房、一九七〇年［初版は弘文堂書房、一九四八年］、三二三～三四〇頁）參照。

（40）張化「中國共產黨百年宗教政策述論」（『上海市社會主義學院學報』二〇二一年、六期、一七～二六頁）參照。

（41）Dengの遼寧省の千山の道觀の道士へのインタビューによれば、ここの道士らは胡三太爺と胡三太奶は中國東北地區の道教の護法であると認識しているということが分かる。（Deng, Claire Qiuju, “Action-Taking Gods: Animal Spirit Shamanism in Liaoning, China,” a thesis submitted to McGill University in partial fulfillment of the requirements of the degree of master in East Asian Studies, 2014.）參照。つまり、他の動物仙も黒老太太とともに神格が上昇し、東北道教の護法とされるようになったと考えられる。

［附記］本稿作成にあたり、註11・註41の先行研究をはじめ、査讀の先生方からは多くのご指摘とご助言をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

表一　『中國地方民俗資料匯集・東北卷』の內容より筆者作成
（丁世良・趙放主編『中國地方民俗資料匯集・東北卷』北京：書目文獻出版社、一九八九年）

	出典	原文
遼寧省	『海城縣志』（六卷·一九三七年鉛印本）	胡仙、卽狐仙也。得道通靈、能爲人消災療病、信奉者頗多。亦有爲之立廟者、稱曰「胡仙堂」、或稱「大仙堂」、各廟亦多附祀者。前淸最崇信、凡金庫、倉敖皆供奉以爲護守。巫者奉之爲主神、爲人療病、每著靈異。據信者雲：胡仙常化老翁、老媼或美少年、美女遊戲人間、犯者必獲譴。故廟中塑像、老少男女不等、皆爲淸代服裝；如有人求祝而驗、則必至廟掛紅懸額。（後略）
	『桓仁縣志』（十七卷·民國十九年石印本）	土地廟、七聖祠、山神廟、狐仙堂、鄉閭到處皆有、每月朔望、鄉人或送香敬奉默求靈佑者。
	『莊河縣志』（十八卷·民國二十三年鉛印本）	鄉村祀胡仙者頗多、似習見不足怪、惟稱黃鼠曰黃仙、蛇曰常仙、婦女信禱之、最爲淫祀。巫祝中、女占多數、專供胡、黃等仙、以治病爲名、俗呼爲大神。
	『安東縣志』（八卷·民國二十年安東鉛印本）	至若狐仙、俗作胡仙、避所忌以尊之也。巫者多奉之、列神堂、供香火。鄉民亦有崇奉者、紙立牌位書仙之本名或行次、上著胡字若姓。有稱三太爺者、多著靈異、尤爲俗所崇奉。他若黃仙、常仙、亦人所敬信、第不及胡仙之盛雲。
	『鳳城縣志』（十六卷・民國十年石印本）	狐仙俗作胡仙、避所忌以尊之也。巫者多奉之、列神堂以供香火。閭有鄉人因病爲之立廟、如山神、土地者、亦多附於各大廟、不塑像、位設木牌書仙之本名或行次、上著胡字若姓。多著靈異、尤爲迷信家所趨奉。竝有黃仙、常仙、亦所敬信、第不及胡仙廟多雲。
	『義縣志』（十八卷·民國二十年鉛印本）	狐仙諱「胡仙」、云系千年得道老狐能予人禍福。其廟或稱「胡仙堂」、或稱「大仙堂」、篤信而祀之者甚夥。亦有因病爲之立小廟、如祀土地者、而巫者奉之爲主神、各大廟內閭有祔祀者。其所稱「胡三太爺」、每著靈異、人尤趨奉。說者謂、常化老翁、或美少年、美女、遊戲人間、犯者必獲譴。又有稱「胡大爺」、「胡二爺」、「胡三爺」及「胡大太太」、「胡二太太」、「胡三太太」、「胡少爺」、「胡少奶奶」者、皆祀廟中。其廟中供木牌者、則書仙之本名或行次、冠胡字如姓、畫像及塑像者、則老少男女不等、爲淸代服裝。如有人求祝而驗、則必至廟掛紅懸額焉。（後略）
吉林省	『吉林新志』（二編·一九三四年鉛印本）	祭神：漢人所祭之神頗多（中略）而最異者謂畏敬狐及黃鼬、凡酒館及農家多供之。
	『海龍縣志』（二十二卷·一九三七年鉛印本）	跳神一事、卽巫婆、爲海龍鄉鎭閭司空見慣之事、卽古書所謂巫醫者是也。其所虔奉者爲狐貍、黃鼠或牛鬼蛇神、尊之如神聖；所供者爲胡、黃二仙及其他各種動物（如蛇、蟒、水獺、狼、龜 等）。（後略）
	『臨江縣志』（八卷·一九三五年鉛印本）	鄉閭山神、土地廟、狐仙堂、到處皆是、每逢朔望、鄉裏有送香致敬者。此風相沿日久、迷信誠難破也。
	『西安縣志略』（十一卷·淸宣統三年石印本）	其供於家中者、尊之曰胡大太太、胡三太爺、黃三太爺（中略）其最信者多薩嗎、有男有女。凡人病卽請男薩嗎禳之、名曰「跳大神」。撾鼓搖鈴、口喃喃作神語、人恆不解、有咒符取藥、攀桿子過陰、送祟諸法。女薩嗎則恆假胡、黃大仙等名以爲主、形狀妖媸、技與男薩嗎略同。

黒龍江省	『呼蘭縣志』（八卷·民國九年哈爾濱鉛印本）	跳神、巫覡、俗名「薩嘛」、又名「大神」、爲人禳病必跳舞、故呼之曰「跳神」。跳神時、腰鈴手鼓、作法演技、托爲狐、黄、白、柳、虺五種神；神來格時、一問一答、答者俗稱「二神」。鄉人有疾者恆延之、知識階級中人不之信也。
	『雙城縣志』（十五卷·民國十五年鉛印本）	狐仙諱稱胡仙、云系千年得道老狐、能予人禍福。其廟或稱「胡仙堂」、或稱「大仙堂」、篤信而祀之者甚夥。（後略）
	『望奎縣志』（四卷·民國八年鉛印本）	有得精神病、哭笑無常者、則謂之邪病。祈禱者修小廟一座、內供胡三太爺等神。
	『東寧縣志』（不分卷·民國九年鉛印本）	邑民迷信之事甚多；如陰陽宅之相地、婚喪事之選期、娘娘廟、老爺符、狐仙堂以及山神、河神、五道、八頭種種淫祀、無不奉事惟謹。
	『寶清縣志』（二十三卷·一九六四年黒龍江省圖書館油印本）	狐仙諱稱胡仙、謂系千年得道老狐、能禍福人。故信而祀之者甚夥、其廟曰胡仙堂、或稱大仙堂。
	『瑷珲縣志』（十四卷·民國九年鉛印本）	禳病用巫祝、漢籍謂「燒太平香」、問休咎、祈保佑。滿洲則重跳神、名曰「跳太平神」。跑（跳）神人腰鈴手鼓、作法演技、拖爲孤（狐）、黄、白、柳、虺五種神；神來格一問一答、問者爲大神、答者爲小神。三月三日、九月九日爲跳神會期、有延僧道、方土（士）建齋醮者。

關於中國東北地區黑老太太信仰的考察

范　倩彤

在中國東北民間、流行着以胡仙、黃仙爲代表的動物信仰。東北地區在祭祀這些動物仙時，常常也供奉一種名爲“黑老太太”的仙家。不過，黑老太太的神格比其他動物仙稍高，竝作爲獨立的仙家與其他動物仙區分開來。

但是，在筆者所查到的1930年代的文獻資料中（包括日本學者方的學術研究和同時期的東北地方志等），雖然記錄了許多關於胡仙、黃仙等與民間信仰有關的內容，卻幾乎沒有看到民間有供奉黑老太太的跡象。

不過，在關於鐵刹山的文獻資料中，出現了少量關於黑老太太相關的記載。從僅有的文獻資料中可以得知，黑老太太的傳說與狐、鐵刹山道敎以及道士郭守眞有著密不可分的聯系。可是，這些資料中對於黑老太太的描述也僅是寥寥數筆。此外，目前對於黑老太太的研究也十分有限。

爲了解黑老太太信仰的祭祀現狀，筆者分別於2020年8月30日、2020年10月25日在遼寧省本溪縣鐵刹山對黑老太太的祭祀情況進行了考察。本文基於實地調查和以1930年代文獻資料爲中心的文獻調查，淺析了黑老太太信仰與中國東北地區胡仙信仰的異同、黑老太太信仰和鐵刹山道敎的關系，及其在東北地區的發展過程。